

俺はもっと笑いたい

夏のレモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生するとしたら、やっぱりチート主人公がいいよね？誰でもそう
だ。苦労なんてしたくない。生きるとしたらイーजीモード。苦労
はほんのちよっぴりでいい。

でも俺は失敗しちゃったんだわ。大失敗から始まる俺の異世界転
生バカ話。

暇な人は俺と雑談しようぜ？ 聞いてくれるだけでいいからさ。

目次

導入的な何か

Good luck で締めくくる

1

おはよう、お日様

11

旅は道連れ世は情け

18

旅のお話

春を追いかける男

28

導入的な何か

Good luck で締めくくる

異世界転生。

昨今ではよく聞く話だ。けど念のため、異世界転生を知らない方のために全体の流れを説明しておこう。

STEP 1

なんらかの理由で死ぬ。神の手違いとか、事故とか、過労死とか。

STEP 2

チートをもらう。『元の世界には帰れないから、代わりに別の世界で新しい人生のスタートだ』からの『お詫びにチートをあげよう』とか、『特典は何がいいかな?』とか。

ここで君達は思うだろう。ちよつと待て神様。なんで主人公にそんなに優しいんだよ。その優しさを少しは世界中の不幸な子供達に分けてやれ。

まあまあ、込み上がる思いは抑えておいてくれ。もしかしたら日本のサラリーマンの神様という、ひどく限定的な神様だったりするのだろう。

そしてSTEP 3

転生する。美少女と出会って冒険者になったりする。そこから何やかんやでヒロインが増えていき、最終的には神レベルの最強の力を手に入れて、不特定多数の一途で可愛いヒロイン達に囲まれて物語はハッピーエンド。

作品によっては異なる部分もあるが、だいたいの流れはこんな感じ。主人公は最初から最強クラスで、話が進むにつれ最強クラスの中のナンバーワンになる。

……うん、言いたいことは分かる。ここは俺が若干テンションを上げて代弁しよう。

都合良すぎるだろ!! なんなのその初期ステータス? 課金したの? なんて序盤から中ボスを雑魚扱い出来るレベルなんだよ!

そもそも美少女なんて街中を一日中歩き回って一回すれ違えるかどうかくらいだぞ? それがなんで何人も主人公に惚れるんだよ!! くだばれ!!

……ゴホン、えー、とにかく、ここまで長々と語ってきたが、何故こんな話をしているのかと言うと、かく言う俺も異世界転生者であり、STEP3の途中までは上手くいっていたからだ。

何? やっぱ都合が良いじゃないかって? いやいや、そうじゃない。

確かに、俺は神様に手違いで殺されたニートで、お詫びにチート付きで転生させてもらえるという、天文学的数字を引き当てたスーパースラッキーボーイだ。

正直な話、転生するってなった時は『はい勝ち確く、後はボス倒すのにちよつぴり苦労すれば万事オツケーじゃん。折角だから日本の知識を広めて金儲けしたろ笑笑』なんて思っていた。

だが、この話ぶりから察してる奴もいるだろうけど、人生はそんなに甘くなかったわけだ。

どうせなら一から話そう。なにせ、俺には時間がたっぷりと余ってるからな。

………

前世の俺はしがない高校生だった。可もなく不可もなく、どこにもいるただの高校生。

ある日、ちよつと小腹が空いたんでコンビニへ行こうと外出したところ、雷に打たれて死んでしまったのだ。

目を覚ますと、そこには三十過ぎぐらいのおっさんが土下座してた。なんでも、俺が死んだのは手違いらしい。

正直カツとなったが、すぐに思い直した。

なんせ信じられないような奇跡が目の前で起こっているのだ。異

世界転生というビッグチャンスを逃すわけにはいかない。

俺は神を許した。誰にだって間違いはあります、的なこと言ったりして。

すると、神は感激して色々な特典をつけて転生させてあげようと言ってきた。

神は俺が答える前に特典をくれた。

その結果、極限の炎魔法適正、膨大な魔力、高い身体能力というテンプレな肉体を貰った。その上、貴族の生まれにしてもらえるらしい。

内心、ニヤニヤが止まらなかったね。でも俺は必死に笑みを抑えて、こんなに良くしてもらって申し訳ない、と頭を下げた。

思えばこれが余計だったんだ。

神は頭を下げる俺を見て、それはもう感激していた。

ここまで謙虚で素晴らしい人間がいるなんてっ！ といった具合でな。

神は感激のあまり、俺を送り出す直前でもう一つチートを俺に付け加えやがった。

『これで君は一生幸せだよ！』

ニツコリ笑顔で手を振る神を思い出すと、今でも腹が立ってくる。

どんなチートなのかって？ まあ落ち着け。どんなチートを貰ったのかは、もう少し後で話すとするよ。

そうしてまんまとチートを手に入れた俺はとある辺境貴族の子供として、第二の人生を送ることになった。

母親は透き通った青い目のブロンド美人。父親は黒い髪に真っ赤な目を持った、スラリとした筋肉質のスーパーイケメンだ。

当然、その二人の子である俺は超美形。父親ゆずりの真っ赤な瞳に、母親ゆずりの金髪。地球だったらトップアイドルになれるレベルだろう。

父親は元は下級貴族の三男坊らしく、魔王討伐という大手柄を立てその褒美として当時第三皇女で聖女だった母と結婚したらしい。

ここまで聞けば分かると思うけど、父は勇者だ。

本来なら伯爵にもなれたはずなんだが、本人は静かに暮らしたかったようで、辺境の貴族として生きていきたいと志願したそうだった。

最初聞いた時は、コイツ、転生者じゃねえの？ と疑った。

だってそうだろ？ 完璧にテンプレ主人公の人生じゃん。普通は下級貴族の三男坊が姫と結婚なんて出来るわけがない。

まあ、神が言うには、この世界で転生者は俺だけらしいし、その可能性はすぐに切り捨てたけど。

なにはともあれ、俺はそんな恵まれすぎている環境で生活することになったんだ。

赤ん坊の時は父親の書齋に忍び込んで言語の練習をしたり、魔法の練習をしたりした。ついでにこの世界の事や貴族社会の仕組みとかも勉強した。

俺は自身の欲望を抑え込んで必死に取り組んだ。

美人過ぎる母親の乳を飲む時は無の境地にまで達した程だ。

それも全部、完璧なテンプレ主人公になるためだ。幼い頃から色々なものを学ぶのはチート主人公のお約束だろう？

勿論、肉体的鍛錬も抜かりはない。少年期には父親に頼み込んで剣術と体術を教わった。まあ？ ちよつと自重出来なくて勝っちゃったんだけどね？あの時の父上の驚いた顔といったら、めっちゃ気持ちよかったな！。

更に早くから言葉を流暢に話せるようになった俺に母親が家庭教師を雇ったが、正直お話にならない低レベルの授業で退屈で論破しまくってやった。

両親は大喜びだったよ。天才だ！ ってね。

成人するまでに学ぶ事はほぼ全て学んだ俺は、ようやく時間が出来たのでそろそろ本腰を入れて動き出すことにした。

両親に頼み込んで超難関貴族学校に入学した。

学生になることでより多くの美少女達と出会うきっかけになる。これこそ王道だろう。

入学初日から俺は有名人だった。

まあ、入学テストは全科目トップだったからな。注目されて当然だった。

貴族学校は最高だった。どこを見回しても一定以上の美女ばかり。最高の学園生活が始まる。期待で胸が膨らんだ。

だが学生になれば当然授業がある。

やはりつまらない。俺は欠伸を噛み殺すのに必死だった。

でも剣術の授業と魔術の実践授業は中々面白かった。教官にあり勝った時の周囲の驚く顔は今でも覚えている。

まあ、勉強の方面でも首席を取り続けたけどな。周囲からは次期生徒会長は俺以外にいないと言われていた。

当然モテた。俺は常に美女で囲まれていた。でも女の子達の相手をしながら金儲けも忘れなかったよ。

まずは食べ物だ。色々な物を作った。

マヨネーズ、醤油、味噌から始まり、卵焼き、ラーメン、ケーキなど。

とんでもなく儲かった。

食文化の革命を起こすことに成功した。

出だしが上手くいった俺はもう止まらなかった。

現代知識で魔道具作ってぼろ儲けしたり、迫り来る魔王軍残党を一網打尽にしたり。

最高の発明家にして無敵の英雄爆誕!!って感じ。

もう高笑いが止まらない。これほどまで最高な人生が俺に訪れるなんて、俺は世界一、いや、異世界一幸運な男だ。

この後のプランとしては、卒業した後は冒険者になって強力な魔物をたくさん狩って実績を積みまくる。そうしていれば、やがて王様も認める真の英雄になるだろう。

そんな都合よく事が動くわけないって？

確かに普通はそうだ。だが俺には確信がある。自信の根拠は両親だ。

聖女と勇者の息子なんだぜ？ 何も起きないわけないだろ？ 絶対魔王復活するでしょ？

強大な魔王を前に逃げ惑う人々。膝を屈する両親。もうダメだと思つたその時!!

颯爽と現れた英雄の息子が父親の意思を継いで復活した魔王にとどめを刺すのだ。

なんてドラマチックなんだ。一連の流れは出来上がってるじゃないか。

そのあとはもうサービスタイムだ。国王になるのも、女達を連れて故郷に帰つてのんびり暮らすのも自由だ。なんなら神になるのもありだな。

……俺は本気でそうなると思つていた。

自分の妄想に酔いしれていたのだ。途中まで上手くいきすぎて小説の世界と現実を混同し過ぎてしまったのだ。

異変は唐突にやってきた。

俺がいつものように女達に囲まれて昼食を取っていると、食堂の扉が乱暴に開かれ、鎧に包まれた兵士達と両親が流れ込んできた。

何が起きたのか訳も分からないまま、俺は魔法を使えなくなる首輪を父に嵌められ連行された。

こんなもの嵌められる謂れはない。

俺は当然抗議した。だが兵士達は抵抗出来ない俺を容赦なくぶん殴り黙らせた。

兵士達に連れられた俺は広場に引きずられていった。

広場の真ん中には処刑台が組み立てられていた。兵士は抵抗する俺を蹴り飛ばし、膝をつかせた。

顔を上げると大勢の人々が憎しみに満ちた表情で俺を見ていた。

そんな中、兵長らしき男が俺の前に歩み出てくると大声で告げた。

「これより魔王裁判を始める!!」

魔王裁判。それは裁判とは名ばかりの、魔王の疑いがある人物に行われる残虐な処刑だ。

なんで俺が……?

困惑している俺の耳に、兵長の読み上げる罪状が入ってくる。

珍妙な料理を作り人々を惑わせた罪。

再三の忠告を無視して危険な兵器を生み出し続けた罪。

婦女子達を強引に侍らせた罪。

魔人殲滅に兵士を巻き込んだ上に地形を滅茶苦茶にした罪。

こういつた逸脱した力と知識を持って人々を恐怖に陥れたこの者は魔王の生まれ変わりで間違いない!!

だって、さ。

何を言っているのか本気で分からなかったよ。呆然としている間にもあれよあれよと魔王裁判は進んでいった。

兵士達は泣きじやくる俺をボコボコにしながら磔にした。

着々と準備が整えられていく中、群衆の中に両親の姿が見えた。

俺を見る両親の目は恐怖と憎悪で歪んでいた。

自分に酔いしれて気付かなかったただけですつとこんな目を向けられていたんだろうね。今思えばあまりにマヌケすぎる話さ。今更気付いてももう遅いつてね。

みんなは十字架に磔になってる俺に石を投げつけてきた。その中には俺の事を慕ってたはずの女達が混ざってたんだよ。

散々ベツドの中で大好き!とか愛してる!とか言ってたのに、憎悪に塗れた表情で拳サイズの石をぶつけてくるんだ。

大人も子供も老人も、みんなが同じ目をしてた。

そうして俺は火炙りにされた。

.....

長々と無駄話に付き合わせて悪かったな。これが俺の人生の全てだ。

ん? まだ終わってないだろ?

ああ、チートの話か。なんて事はない。ここまでひっぱっておいてなんだが、本当につまらないチートなんだ。ありきたり過ぎてみんなはもう飽きてると思うぜ?

そうだな、折角なら格好のいいルビを振ろうと思ったけど、こんな

つまらないチートならシンプルの方がいいかな？
不老不死

な？ つまらないだろ？しかも発動したのが俺が火炙りされて死んだ後だったんだ。

つまるところ、俺のイケメンフェイスは火傷で台無し。無敵の炎使いが全身火傷なんて皮肉が効いてるよな。

いま俺は王宮の地下深くに閉じ込められているんだ。

火炙りが失敗した後、なんとか俺を死なせようと試行錯誤されたけど全部失敗に終わった。

神の与えた祝福ぞ？ 人間風情にどうにか出来るわけあるめえ。

でも痛いものは痛いわけで、マジで生き地獄だったよ。その間、何度神様を呪ったか分からない。

憎しみの力でパワーアップする奴とかいるよな。でも、俺の場合はそのパターンじゃなかったらしい。

何度か頭おかしくなって復讐に燃えてみたけど、特に変化はなく殺され続けた。

怒りの感情は長続きしないって身をもって知ったね。

怯えから怒り、怒りから後悔、後悔から懺悔といった具合で感情はループしていった。

もう一周回って普通の人格に戻ってきちゃったよ。

物語ならこうなる前に身を呈してヒロイン達が守ってくれるんだろうけど、これが現実なんだぜ？

拷問されながらも高笑いをあげる俺を見ると、みんなは石を投げるのをやめるんだ。そうなると益々笑いが止まらない。

怖いのかねえ？ 抵抗出来ない俺が。ただおかしくて笑ってるだけなのにな。

思えばテンプレが現実に通用するわけがねえんだよなあ。なに勘違いしてたんだか。

どこから間違えてたんだらうなあ……。

神様騙したからバチがあたったのかなあ……。

と、何億回目かの後悔をしてみる。

さて、オチはついたかな？ 悪いが時間切れだ。そろそろ処刑の間なんですね。やつこさん、なんとしても俺を殺したいらしくてさ。というわけで最後に一つだけ言わせてもらおう。

楽しんで得た力なんかには頼ってはいけない。過程があつての結果だからこそ意味がある。安易に楽な道を選ぶと俺みたいになるから要注意だ。

by 君達の先輩より

なんてな。それじゃあ本当にさよならだ。俺の自我が何回か崩壊したころにまた会おう。

Good luck

……………

プツツ……

映像が途切れた。彼を転生させた神は頭を抱えた。

「あちやー……どーしよお……」

オロオロと真つ白な世界を歩き回る。

「まさかあんなことになってるなんて……」

ふと気になって見てみた結果があれだ。神は本気で泣きそうだった。

「どうにかしてあげたいけど……現世に力の行使は出来ないし……」

しばらく頭を捻っていた神だったが、やがてパンと両手を合わせた

「ごめん!! 私では何も出来ないんだ!! 許してくれ!!」

数秒拜んだ後、神は晴れ晴れとした表情で額を拭った。

「ふう……起きてしまったことはどうしようもないからね。神の謝罪を二回も受けれたってことで勘弁してもらいたい。素晴らしい人格を持つ彼なら許してくれるだろう」

神は再び映像を浮かべた。映されたのは彼のいる世界の全体像だ。

「彼なら神にだってなれると思っただけだなあ……僕の部下にして仕事減らしたかったの……」

神は残念そうに唇を尖らせた後、改めて仕事を再開した。

「仕方ないか！ 切り替えていこう!! おー!!」
すでに神の頭からは彼の事は消えさつていた。

おはよう、お日様

やあ、久しぶり。俺だよ。テンプレ人生で大失敗かました元主人公さ。

久しぶりはおかしいって？いやいや、君達からしたら次の話ボタンを押しただけなんだろうけど、俺からしたら100年くらい経ってるんだよ。

とつくに両親も天寿を全うしてるだろうし、王様も三世代くらい交代したのかな？　　とかまだ国あるのかな？　　地下暮らしが長すぎてよく分からないや。

もう完全に封印されてて情報入ってこないんだよね。魔法封じの首輪に鎖でぐるぐる巻き、更には地下深くに専用の牢屋を作られて監禁なう。今更気付いたけどお父様よ、この首輪さては特注品だな？　　俺の魔力吸って無限に頑丈になる仕様ですなこれは。

キツイなあ、暇すぎるなあ、腹減ったなあ。これ絶対忘れ去られるよなあ。

さつき100年くらいって言ったでしょ？　　なんで分かるのかと言えば数えてたからなんだよ。分かる？　　100年ずつと数字を数えるしかやる事がなかったんだ。凄い暇なのが伝わったかな？

なーんて事を話していると、久しぶりに誰かがやってきた。

ポツチャリで偉そうでオカッパ頭で、言い難いけどすごい頭悪そうなお顔した子供が大勢の兵士従えてやってきた。ボンボンの息子って感じ。

次の国王様なんだって。

へー、まだ国あったんだね。で、そろそろ終わるんだね？　　(失礼) そんな事を考えていると新しい王様は目を輝かせて熱い視線を送ってきた。

え？　　なに？　　俺っちのイケメンっぷりに欲情したの？　　ごめんなさい。そっちの趣味はありません。

かと思ってたら違った。身体に興味はあったけど不老不死の方

だった。

もう凄い崇められた。どうやら昨今の流行りでは不老不死にあやかりたくて仕方ないらしい。

魔法陣の上で怪しげな儀式させられたり、

血を抜き取られたり、

生贄捧げられたり、

気づけば怪しい宗教の始祖的なものになってた。

無駄だよ？ 俺ただの人間だよ？ だから子羊やら子供やらの生贄いらんよ？

そう言いたかったけど舌が麻痺してて全然伝わらなかった。むしろお怒りだと勘違いされて信者の一人を生贄に捧げてきた。いらんちゅーねん。

やっぱり100年も経てば色んな事忘れるんだろうね。あんなに俺を怖がってた人々がキラキラした目を向けてくるんだもん。ただ不老不死なだけの俺を神聖な存在として崇めちゃうなんて人間って単純っ。

信者さん達のお願い聞いたりするんだけどさ、これがまたドロドロしたものばかりでね。

誰それを殺してくれとか、金が沢山欲しいとか、亭主を誑かした女を呪ってくれとか、奪われたわけでもないのに女を奪いかえしたいとか、共に世界を終わらせましょうとか、人の闇を見た気分だよ。

特に面白いのが何にもしてないのに感謝されることだ。ほんと、継りつけばなんでもいいんだろっね。

気が付けば俺の生まれた国は怪しい宗教国家になった。

まあ、それでも俺に自由はないんだけどね。崇められるだけ崇められて、依然ガツチガチに簀巻き状態です。捧げられるのは生贄ばかりでロクにご飯もくれない。願うだけ願って俺の要望はなに聞いてくれないんだわ、これが。神様って損な役割なんだね。

でも転機はやってきた。それは、ある日突然やってきた。

地震、雷、火事、親父。厄災がこれでもかと言うほど襲ってきたのだ。民達は餓えに苦しみ、家族を失い、多くの悲しみが国で溢れたら

しい。直接見たわけじゃないから知らんけど。

どうにかしてくれってめっちゃ頼まれた。

いや、無理ですけど？（笑）

天災とかどうにもならないし、というか無理にせよ何にせよどうにかしろってんならこの拘束解いてくれない？（半ギレ）

そんなこんなで、いつまで経っても何もしないもんだからとうとう信者達がブチギレた。

邪神じゃ!! 疫病神じゃ!! やはり魔王の生まれ変わりじゃ!! つて王様が先頭に立って責めてきた。

最初に崇めたの貴方ですけど？ 随分と手首が柔らかいようで、クルクル回りますね。

結局誰も疑問を持つことなく全て俺が悪いということになった。なるほど、これが理不尽か。

あれよあれよと神輿に担がれ何処ぞの谷底へ叩き落とされた。不思議なことに、その数日後に厄災は治ったらしい。当然宗教も消滅した。まあ、結局バカ王がバカな事して国も消滅することになったんだけどね。

いや、そんな事はどうでもいいんだ。重要なのは落下の衝撃でとうとう首輪が壊れたことだ。そして地下から解放されたということ。

俺がその事に思い至ったのは谷を這い上がってからだだった。それでもしばらく朝日に目を奪われて気付いたのは大分後になったけど。

赤とオレンジの境目くらいの優しい光だった。自然と口元が緩んだ。

おはよう、お日様。

なんでか涙が流れた。流れる涙が残っていた事に自分でも驚愕。

それでも今だけは浸っていいはずだ。俺が許す。異論は認めない、絶対だ。

.....

太陽が登り真っ白な光に変わったところで、俺は人気の無さそうな

山の中腹辺り行き全力で雄叫びをあげた。

Y E A A A A A A A A A A A A A A A A!!

開放感が半端じゃない。やまびこも嬉しそうに返ってくる。

あースツキリした。これからどうしようかワクワクが止まらない。

ん？ 復讐？ ないない。そんな感情、とつくの昔に枯れ果てました。

それに折角手に入れた自由を復讐なんかシフトチェンジしたくない。あ、でも神様は殴る。あいつだけはボコボコにしてチート全部消させる。

そうやってウキウキ気分で山を降っていると、山へ芝刈りに来ていたお爺さんに出くわしてしまった。

固まるお爺さんに俺は爽やかな笑顔で挨拶した。挨拶は社会人の基本だろ？

でもお爺さんは挨拶を返してくれなかった。

え、シカト？ 辛いんだけど……。

なんて思ってたんだけど、お爺さん、立ったまま気絶していた。

なんて気高い年寄りだ。意識を失ってなお、地に屈することはないうってことか。

俺はお爺さんに敬礼し、武士の情けで口元の泡を拭いてあげた。

泡吹いたままじやみつともないからな。

ついでにお爺さんの服を拝借した。ほぼ全裸だったから助かった。

さあ、服も着たし、準備は整った。俺の冒険を始めよう。

ん？ なんでお爺さんは気絶してるのかって？ ああ、そうか、君達には俺の容姿が分からないんだったね。

自慢だけど、俺はイケメンだった。金髪赤目、目鼻立ちが整った顔を持ち、高身長で、無駄な脂肪は極限まで落としつつ、シックスパックがハッキリと見える細マツチョ。

要するにイケメンです。ウイנקしようものなら子供からお年寄りまで射留めてしまう、少女漫画の世界でキヤーキヤー言われるイケメンです。

でも皆さん、お気付きかな？ 俺はこの話を過去形でしているん

だ。

そう!! 現実にはいたら間違いなく袋叩きにしたくなるようなイケメンはもういない!!

というわけで今の俺の姿がこちら。

なんというところでしよう、スーパーイケメンは見る影もなく、全身は余す事なく真っ赤に爛れバケモノのよう。もともと赤かった瞳は、充血してより真っ赤に、自慢の金髪は一本たりとも残っていません。目は窪んで、真っ白な歯は剥き出しです。(歯並びはいいです。凄くいいです)

身体の方も当然隅々まで大火傷、皮膚全てから血管が浮き上がってます。

悲惨だと思うかい? でも俺は気にしないよ。いまの開放感に比べれば些細なことさ!

でもこれだと少し目立つのが気になる。それにヒリヒリする。

そうだ、包帯でグルグル巻きにしよう。それで年中長袖、長ズボンを着用してフードと手袋を常備しておけば割と普通に見えるんじゃないか?

旅をするなら目標も欲しいな。あてのない旅はそのうち飽きるだろうし。

……決めた。旅の目標は神様との再会だ。そんなもって途中で面白そうなものがあつたら首を突っ込んでみよう。時間だけは腐るほどあるからね、余裕を持って旅をしよう。

そうだ! このままチート無双してもつまらないだろうし縛りプレイで行ってみよう。絶対に誰かを傷付けてはいけなくてルールを課すことにする。

うん、その方が絶対面白い。世界最強クラスの技量と才能があるのに一切まともに行使されることなく終わるなんて、神様に抵抗してるみたいでカッコいいじゃないか。

ハードだねえ、ワクワクするよ。当然、魔獣を狩るのも無しだ。これからの時代はベジタリアンさ。何に襲われても話し合いで解決しよう。諦めなければ思いは通じるさ。

さあ、行こう。

目指すは東。太陽が昇る方向こそ今の俺に相応しい。

.....

こつからは余談だから、気にしなくてもいいよ？　たださつそく面白い話を聞いたからみんなにも聞いて欲しいんだ。

これは、俺が自由になつてから半年後、とある村を歩いていた時にふと耳に入つた怪談話なんだが。

どうやら、近頃気味が悪い怪物が出るそうさ。

事の発端はとある勇敢な青年が怪物にバツタリでくわした事から。

真夜中に現れたそいつを青年がクワで殴りつけたところ、怪物はあつさり倒せたそうさ。

青年は拍子抜けしながら怪物を山に捨て帰宅することにした。

だが山を降る途中、何かが背後から追つてきた。振り返っても何もいないが足音だけは近付いてくるのだ。

気味が悪くなつた青年は足音を振り切ろうと山を駆け降りたが、足音は家の中まで追いかけてきた。

青年はクワを手に隅で待ち構えた。だが待てど暮らせど足音の正体は現れない。

安心した青年がホツと肩の力を抜いた直後、先程倒したはずの怪物が上から降つてきた。怪物は泡を吹く青年に近付きそつと何かを呟くと、何もせず去っていったんだそうさ。

なんて言つたのかは分からない。でもそれ以来、勇敢だった彼は家から出なくなつてしまつたそうさ。出入り口全てをガチガチに固めて、誰も入れなくなつた。

友人達が呼びかけたところ、なんとか聞き取れたのは『奴が来る……奴が来る……』という声だけだった。

怖いよねえ。怪物はなんて言つたんだろう。

おつと、変な空気になつてしまつた。気分転換にこれ食べるかい？　この前、友達になつた人から貰つた干し芋だよ。え？　奪つてきた

んじゃないかって？

とんでもない。そりや出会った当初は、この外見にビックリされて警戒されまくったけど。でも諦めずに距離を縮めようと頑張ったら家まで招待してくれたんだ。

流石に悪いなあ、と思ってお土産だけ貰ってすぐ帰ったけどね。勿論、ちゃんとお礼は言ったよ。

『マタクルヨ』

ってね。ん？ なんだいその反応は？ なんか引かれてる？ あ、まさか……

また俺なにかやっちゃいました？

旅は道連れ世は情け

夕暮れ時、一人の少女が森の中を彷徨っていた。
薄汚れたボロを纏い、周囲を見回す。今晚の夕食を探しているのだ。

「ッ!?!」

何かを発見した少女は素早く木の陰に隠れた。

視線の先にはローブを着た男が無数の魔狼に食われていた。
きつとこの辺りの事を知らない旅人だったのだろう。ああなつてはもう助からない。魔狼に襲われた者は骨一つ残らないのだ。

少女は魔狼に気付かれないよう慎重にその場から離れようとした、その時だ。

男の手が魔狼の頭へ伸び、戯れるように撫で回した。

「っ!?!」

驚きで硬直する少女。男は依然頭を丸齧りされた状態で魔狼を可愛がっていた。

魔狼は混乱し情けない鳴き声を上げながら森の奥へ逃げていった。
男は去っていく狼を見て寂しげに空いた手を見つめている。

「っ………!?!?!」

その男の横顔を見て少女は思わず息を呑んだ。

包帯でグルグル巻き顔の顔。隙間から見える肌は人の肌とは思えないほどくすんでいて、真っ赤な目がギョロギョロしていた。

(ゾンビ!?!)

思わず叫びそうになるのをグツと堪える。

ゾンビ、人の死体が蘇ったもの。幽霊と同じく実在するはずのないモノが目の前にいた。

少女は震える手をゾンビへ向け、氷の礫を射出した。

ゾンビは頭部を貫かれパタリと倒れた。

これでいい。

少女はゾンビから目を離し、安心したように隠れていた木にもたれかかった。

ゾンビは頭を潰せば殺せる筈だ。

ゾンビは頭、口裂け女にはべっこう飴、幽霊には塩、定番である。だが再び少女がゾンビを見た時、すでにその姿は何処にもなかった。

「え？」

死体がない？

少女は慌てて周囲を見回したが、やはりどこにも死体はなかった。気味が悪いとは思いつつ、少女は帰宅することにした。あまり長居すると夜になってしまう。夜の森は危険すぎる。

少女はゾンビがいた場所に背を向け、自宅に戻っていった。

.....

ぶはあ!! ぜえ……ぜえ……

やあ、また会ったね、俺だよ。何してるって？ 見ての通り、地面から這い出てるどころさ。

強引に地面を抉った穴に隠れてたんだけど、ちよつと暑苦しいね。でも真冬なら程よく温めてくれそうだ。昆虫が冬眠するのに地中を選ぶ気持ちがよく分かるよ。

それにしてもビックリだね。まさか問答無用で殺されるなんて。

ビックリしすぎて慌てて隠れちゃった。

ん？ 殺されてないじゃないか？ いやいや、頭貫かれたんだよ？ ワンカウントでいいでしょ？

それにしてもおかしいなあ、彼女どう見ても平民だよな？

平民が魔法使った？ 魔力は誰にでもあるから魔法を使えないこととはないけど……

でも魔法に関する教本ってめっちゃ高いんだよ？ 失礼だけど彼女は どう見てもド貧乏だ。

キュピーン

俺の面白センサーが反応しましたよ。

気になるねえ？ 何者かなあ？ 第二の転生者？ ただの天才？

あく気になつて夜も寝られない、ついでに朝も寝られない。

早速追いかけてよう。そして、まずは観察してみよう。その後は……

まあ、成り行きで。

カツコよくバサツとローブを靡かせる。

ありや？ ローブが穴がだらけだ。あのワンコ達のせいかな？

これじゃカツコつかないなあ。

ま、いつか。急いで行こう♪ さあ、行こう♪

……………

俺は少女を追つて小さな町に辿り着き、あつさり住処を特定した。

……なんかストーリーカーっぽいなあ。そうだ、少女じゃなくてターゲツトって言おう。それなら名探偵っぽいよね？

こちらスネーク、ターゲツトの自宅を特定。指示をくれ。

うん、いい感じ。あれ？ これ軍人だわ。ま、カツコ良ければなん

でもいいね。

時を戻そう。

俺はしばらくターゲツトの家を観察したんだ。どこで魔法と関係してるのか知りたくてね。来る日も来る日も観察したさ。

正しく雨にも負けず、風にも負けず、雪にも夏の暑さにも負けず。

……言い過ぎました。そんなに長く観察してません。

観察の結果、ド普通の平民だった。

家族構成は母、兄、姉の四大家族。

ターゲツトの一日はこうだ。

朝から晩まで何軒も掛け持ちで働き、夜は家族の世話をして一日が終わる。食事の準備も片付けも、全部ターゲツトの担当。掃除や、家族が散らかした物を片付けるのも担当してるようだ。

そして母親と姉は男漁り大好きなビッチ、兄はチンピラ。

あれれー？ おかしいなあ？ なんてあの女の子だけが苦労して

るのかなあ？ あ！ これってもしかして、虐待ってやつかなあ？
僕知ってるよ！ テレビでやってたもん！

茶番は置いといて。末っ子である彼女は家での立場が弱いんだろ
う。

父親はもう死んでるようだ、南無南無。

ターゲットはよく殴られてた。それを見た時、俺は思ったね。

『あ……あいつら死んだ』って

……だって仕方ないじゃん!! (逆ギレ)

普通は『許せねえ』とか『なんて酷いことを……』とか思うべき場
面なのは分かってるよ!?

でも怖い目してたもーん！ 今にも人を殺しそうな凶悪な人相
だったんだもーん！

でも三人は殺されることはなかった。

家族が去った後、ターゲットは手に持っていた箒をベキイツって握
りつぶしてた。

こえー、あの見た目でバイオレンスですよ。箒が人の首だったらベ
キイツですよ？ 首がグルンツてなっちゃうよ。俺だったら泣い
ちやうね。

その後も、ターゲットはボロボロになりながら仕事を続けていた。
健気だねえ、見てて可哀想だったよ、涙なしでは見れなかった。顔
怖いけど。

グリム童話に出来るよ。何かいいことが起きるといいね。

あれ？ 目的なんだったつけ？ ああ、そうだ、魔法のことだ。

結局、魔法を使ったのは狩りをしてる時だけだった。

なーんにも分からずじまい。でも気になるよなあ、観察すればする
ほど気になるなあ。ここで終わるわけにはいかないよね？

そこで俺は考えました。どうすればターゲットの秘密を知れるの
か。

そして気付いたのです！

『そうだ友達になろう！』

仲が良ければ話してくれるよね？ 見たところ、ターゲットに友達は

いなさそうだったし。

とはいえ難易度は高そうだ。なにせ出会った瞬間殺されたのだ。直接会いにいったら同じ結末になるのは目に見えてる。

そこで俺はジワジワと迫ることにした。

STEP 1 : 町を彷徨う。

『このロープに穴を開けたのは誰ですか?』

と言いながら歩き回るのだ。昼間は何故か憲兵達に追われるから、逃げやすい夜に彷徨った。

そうすれば町中に俺の噂が広まる。ターゲットは俺の事を意識してくれる筈だ。

STEP 2 : 徐々にターゲットに気付かせる。

俺の姿をターゲットにチヨロツと見せるのだ。そうなるとターゲットは思うはずだ。

『あら? あの人はある時の? まさか町のみんなが噂してた人って彼の事かしら? もしかして私を探してる?』

運命感じちゃうよね? ドキツとするはずさ。

そしてトドメのSTEP 3!! 出会う!!

『友達になってくださいー!』

するとターゲットは感極まって涙を流すのさ。

『はい! 喜んで!』

エンダアアア、イヤアアアア!!

SUCCESS!! 勝った!!

俺はこの作戦を即実行した。勝利を確信してたよ。

でもね? 完璧に思えたこの作戦は、驚くことにSTEP 3の途中までしか上手くいかなかったんだ。

え? 割と予想通り? そんなバカな……少女漫画を参考にして立案したのに。

まあ、いいや。

すっかりSTEP 2まで事を運んだ俺は、ターゲットが一人になる時、つまり狩りをしてる日を狙って彼女の前に現れた。

そしてトドメのセリフを言おうとしたんだ。

でも言えなかった。喉に氷が突き刺さってね。

あれー？　なんでー？

俺は次々放たれる氷から逃げながら本気で首を傾げた。不思議で仕方なかったよ。計画は完璧だったのに。

やっぱり小細工が良くなかったのかな？　面と向かって話すのが一番なのかもしれない。

男は直球勝負だ。覚悟を決めた時こそ真っ直ぐに。

そう思い立ち振り返って向き合った時、気付いた。

あれ？　なんか泣いてね？

よく見ると目が潤んでたんだよ。それに攻撃しながらちよつと震えてた。

そして俺にこう言うんだ。

『死ぬゾンビ!!　もう二度とあたしの前に現れるな!!』

ガビーン!

Oh……なんてこった。

どうやら俺は彼女に酷く嫌われてしまったようだ。

シヨックを受けつつも攻撃を回避し続けてたわけなんだけど。徐々にターゲットの容姿が変化していった。

黒い髪は段々と白く染まって、白目の部分は真っ黒に、青かった瞳孔はドロリとした紅になった。

着ていたボロ布は消え去り、代わりに真っ黒なドレスを身に纏っていた。

えー……?!?!?

目が点になつたね。口なんて開きっぱなし。

俺がアホヅラ晒してる間でも、彼女は攻撃の手を休めない。むしろどんどん激しくなっていく。

『この魔王に恥をかかせた報いっ!!　消滅して償うがいい!!　このゾンビがっ!!』

え？　なんて？　ゾンビ？

俺が……ゾンビ……?　嘘ダア……

シヨックだったよ。まさかゾンビだと思われてたなんて。

そう思われていたんだとしたら辻褃が合う。少女漫画戦法の絶対条件は男役がイケメンである事だからね。

冗談さ。つまらないギャグは受け流してくれ。ふざけないと話ができない病気なんだ。

そうそう、彼女の正体、魔王なんだって。昔、勇者に倒された時に禁断の魔法を使って転生したんだそうさ。

本当は魔族になるはずだったのに、手違いで人間の子になっちゃったんだと。

このスーパーラッキーボーイは、天文学的数字を二度も引き当ててしまったようだ。人間に転生した魔王に出会うなんて、とてつもない確率だろう？

なんで魔王少女の事情を知ってるのか？ そりゃあ、コミュニケーションを取ろうと頑張ったからさ。文字通り必死にね。なにせ不老不死なんで。

結局、魔王はガス欠になって攻撃をやめた。でも涙目で俺を睨むのはやめなかった。

『なんなんだよお……なんでゾンビなのに機敏なんだよお……』
だからゾンビじゃありませんって。

『チクシヨオ……ぶっ殺してやる……!!』

怖い怖い怖い！ 目が！ 目がマジだよ！

この後メチャクチャお話した。なんとか理解してもらえたよ。
俺が人間だつてことは信じてもらえなかったけどね！

H a h a h a h a h a !!

どうやら魔王さんの記憶が戻ったのはつい最近とのこと。

記憶が蘇ってすぐ憎き勇者へ復讐しようと考えたらしいけど、とつとつに寿命で死んでた。

だからせめてその子孫を見つけ出して根絶やしにしてやろうと力を蓄えていたらしい。

本当なら今すぐにでも家族を殺してやりたかったらしいけど、まだ騒ぎを起こすわけにはいかないから必死に我慢してたんだそうさ。

怖いねえ、復讐誓ってなかったらこの町の住人、皆殺しにしてたら

しいよ？

なにはともあれ、謎は解けました。もうここに俺を笑わせてくれる
ネタはない。

強く生きろよ、魔王様。

あ、ちなみに俺は勇者と聖女の息子だけど狙わないでね？

俺はそう言い残し、彼女の呼び止める声に後ろ髪を引かれながら
ハードボイルドにその場を後にした。

クールに去るぜ。

.....

無事謎を解明したので俺は気分良く休憩をとっていた。

眩しい太陽、程よい木陰、揺れるハンモック。最高だねえ。ハン
モックを考えた人ってノーベル賞もらったのかな？

ガンダア〜ラア〜、ガンダア〜ラア〜。ゼイツ！　ゼイツ！　イツ
トワズ、イン、イクンディア〜！

やあ、調子はどうだい？　俺はすこぶる絶好調さ。地球に居た頃の
推しソングを口ずさんじやうぐらい良い気分さ。これ西遊記のテー
マソングなんだけど知ってる人いるかな？

天気も変わらなさそうだし、今日はここでお昼寝かな。

で、どう？　今回の話は面白かったかい？　面白いと思った人は声
を上げて笑おう。『つまんね〜』とか『クソだわ』と思った人は喉が張
り裂けるまで嘲笑おう。

笑うネタなんてなんでもいいさ。人生の大半を笑顔で埋め尽くせ
ればいいんだから。笑うってステキなことだと思わないかい？

脈略のない話はやめろって？　無理無理、なんせ俺の頭はパツパラ
パーだ。パツと浮かんた事を話してただけなもの。

というわけで俺も笑うとするよ。笑うネタは……そうだなあ、あの
時の魔王さんにしよう。

アハハハハハ!!　アベシツ!!　お腹から氷が生まれた!?　そし
てハンモックに穴が!?

つゝつゝ!! 誰だあ!! ハンモックを串刺しにしたのは!! せつかく気持ちよく笑ってたのに!!

見上げると魔王少女が俺を見下ろしていた。

おや? 魔王さんじゃないですか。

気持ち悪い笑い声をやめろ? そんなあ、たつた今笑うことの素晴らしさをみんなと共有してたのに。

それでどしたの? なんでここに? え? 家出した? マジ? ご家族は?

あ、いいです。言わないでください。その邪悪な笑みで全て察しました。

でも家出かあ、思い切ったことしたねえ? これからどうするの? 魔族のところに帰るのかな?

違う? ああ、そりやそうか、人族と魔族は仲悪いもんね。魔族の魂持った人間とか歓迎してもらえなさそう。

んじやあ、どうするの? え? 俺を殺すまでついて来るって? いやいやいやいや、復讐なんて辞めておきなつて。憎しみの連鎖を断ち切ろうよ。

あ、冗談です。冗談だからその目やめて。いきなり魔族の目するのやめて、怖い怖い。

え? 怖い思いさせられたんだからおあいこ? はて? いつ俺が怖がらせたのかな? 身に覚えがないや。

まあいいや。旅は道連れ世は情け。ニッコリスマイルで大歓迎さ。おーい、そんな距離取らないでー、大丈夫だよー、ホントだよー。

……そんなにステキな笑顔だったかな? では今日という日を記念して、乾杯といこうか魔王さん。

魔王さんはやめろ? もう魔王じゃないから? じゃあなんて呼ばば……。

へー、レヴィって名前なんだ。初めて知ったよ。

ん? 俺も名乗るの? そうだなあ、気軽に『ああああ』でいいよ。痛い! 叩かないで! 仕方ないじゃん! だって名前忘れたも

ん! 最後に名前呼ばれたの、めっちゃ昔だし!

へ？　じゃあ私が決める？　まあいいけど……

というわけで俺の名前がボロになりました。なんか犬みたいだね？

いいえ！　文句ありません！　素敵な名前だなあ！

ボロボロだからボロか。パツと見の印象って大事だよな？　その方が覚えやすそうだし。

歳はいくつだい？　人間としての年齢だよ。へー、魔王なのに年相応の見た目なんだね？　俺と五つしか変わらないや。（サバ読み10年）

そんなに驚愕しないでよ。俺だってピチピチの若者だよ？

え？　死んだ時の歳なのかって？　だから俺はゾンビじゃないんだって。

この包帯は封印なのさ。包帯に封印術式を書き込んであるんだ。

『くっ！　静まれ！　俺の中の邪神龍よ！』

包帯とつたらどうなるのか？

いや、別に何も起きないよ。俺の素顔が曝け出されるだけ。

痛い!?　やめて！　軽いジョークだよ！　場を盛り上げるための

お茶目な冗談さ！

ふう、なんとか逃げ切った。それじゃあ今回はこの辺で終わりかな。また会いに来てよ。その時までには、とっておきのお話を用意しておくからさ。

じゃあね　♪

旅のお話

春を追いかける男

様々な国、文化、人種、更には超常現象まで存在する世界、ハバラ。そんな混沌世界を旅する奇妙な二人組がいた。

煤けたコートを着た包帯でグルグルの大男、ボロ。

そして旅人らしいローブを羽織った黒髪黒目の美少女、レヴィ。

魔人と人が争う国を出た二人は神様に会える場所を目指して東へ歩いていった。

男と少女の二人旅は酷く殺伐としたものだった。

片や神に見捨てられ人々に畏怖された不老不死の元英雄、片や大昔に人に倒され恨み千万の元魔王だ。殺伐とするのは当然と言えば当然の話だった。

だが一見殺伐に思える二人だったが、内情は少し違った。

ボロはレヴィの反応が全て愉快に思えるようで、殺意ましましな彼女を前に大笑いをかましていた。

レヴィの方はそんなボロを相手に怒りを爆発させまくったが、いかんせん相手は不老不死だ。何をしても全て無意味に終わった。

そんなこんなで、逃げて笑って殺されてを繰り返しているうち、とうとう二人の路銀が尽きてしまった。

「どうすんだよ、おい!!」

草花生い茂る草原の中、レヴィはすっぴんになった袋財布を逆さにしてボロに詰め寄っていた。

「とうとう全財産無くなったぞ!!」

「バアハハハハ!!」

「笑うなっ!!」

レヴィは袋をボロの顔面に叩きつけ胸ぐらを掴み上げた。

「ちよつと目を離れた隙に変なものばっか買いやがって!! この大馬

鹿野郎!!」

ブチギレルレヴィ。だが、それも当然のことだった。

ボロは何処かへ立ち寄る度に何かしら面白そうな物を買って漁っていたのだ。

例えば

ほぼ無限に荷物が入る異次元巨大リュックサック（ただし質量は変わらない）

虫寄せスプレー（虫が必要な研究者や肥料集めに使われる）

魔除けネコ（幸せになるらしい）

変わった模様の壺（ただの壺）

レヴィはその他諸々の大量のガラクタを指差してがなり立てた。

「何に使うんだよ!?! 重くなって仕方ねえだろ!?!」

「マアマア、オレガセオウカラ。ソウ、オコルナ」

落ち着かせるような手振りをするボロの顔面に渾身の拳骨が叩き込まれる。

「金の話をしてるんだよ、あたしは!! お前が見てくれのせいでまともに乗げないから、いつもいつもあたしだけが頑張ってる……!!」

「あの一……」

「なんだよ!! 今取り込み中だ!!」

二人が声のした方を見ると、大きなキャンバスを背負った老人がいた。

「お金に困っているというのなら雇われませんか？ 相応の額を払いますよ?」

「へ?」

ボロとレヴィは同時に素っ頓狂な声を上げた。

……………

花びら舞う草原の中、レヴィは精一杯の笑顔とぶりっこでポーズをとっていた。当然それを見たボロの反応も分かりきっていた。

「バアハハハハ!!」

「笑うな!!」

「動かないで」

「くぬ……………はい……………」

渋々ポーズをとるレヴィ。老人は真剣な面持ちで鉛筆を構え続ける。老人は画家だった。

「こ、こうでいいのか?」

「ええ、しばらくそのままお願いします」

ボロは興味深げに絵を覗き込みながら老人に語りかけた。

「アナタハ、オレガ、コワクナイノカ?」

「怖いだなんて。とても素敵なお顔だと思いますよ?」

その言葉にボロはレヴィへ顔を向け嬉しそうに歯を剥き出しにした。

「ニイ……………」

「怖いからやめろ。凍らせるぞ」

ピシヤリと告げるレヴィの顔はとても冷たくマジなものだった。

・

しばらくして日も沈み、続きはまた明日ということになった。二人

は老人の好意で夕飯を分けて貰っていた。

「悪いな、飯までくれるなんて」

「いえいえ、遠慮せずたんとお食べください」

ボロは飯を食べながらレヴィに耳打ちする。

「ズイブン、スナオダナ。ニンゲンギライ、ナノニ」

「はあ? それはあの国の人間の話だろ?」

外国人なら話は別らしい。

「ソウイウモノナノカ?」

「あたしはそう割り切ってるってただけだ。他は知らね」

ほーん、といった顔で再び飯を食らうボロ。

「それにしても、画家って旅するものなのか? なんか一生室内で絵を描き続けてるイメージだけだ」

「ははは、まあ確かに殆どの画家は旅などしませんね」

レヴィの質問に老人は茶碗を置いてゆったりと答えた。

「私はね、春を追いかけているんですよ」

「……………春?」

「ええ、この暖かな日差し、あらゆる生命が目覚めるこの季節を絵にしたいんです」

老人の言葉にレヴィは納得しきれないといった様子だった。

「でも旅するほどのことか? 少し待つときやすぐ春になるぞ?」

「いえ、一枚でも多く描きたいんです。なにぶん年ですからね。時間が足りない」

「イツカラ、タビヲ?」

「今年で七年になりますね」

淡々と答える老人に二人は目を見開いた。

「七年!? ずっと春の絵だけ描いてるのか!」

「ええ。なかなか満足出来なくて」

ケタケタと軽快に笑う老人。釣られて笑うボロと老人を眺め、レヴィは眉を顰めながら食事を続けた。

やがて食事も終わり、老人は食後の散歩に出て行った。

レヴィは火の番をしながらボロに話しかける。

「変わった老人だなー」

「アア、オモシロイ、ヒトダ」

「よっぽど春が好きなんだな。七年も同じ季節を描き続けるなんて」

「コダワリノアル、ガカハ、イイガカダ」

「絵のこととか分かるのか?」

「ワカル。タクサン、ミテキタ」

正確には邪神教時代に沢山捧げられた、だが。

「ほーん」

レヴィが興味なさげに後ろへ倒れ込んだ、その時。

「あ……………」

レヴィの手に引つかかり老人のバッグがひっくり返ってしまった。
「やばっ！ 早く戻さない、と!？」

慌てて起き上がったレヴィは思わず固まってしまった。

ぶちまけられたのは春を描いた絵と、そして絶望と恐怖の入り混じった人々の悍ましい絵だった。

「な、なんだよこれ!？」

「コレハ…………!!」

ボロは驚きながら悍ましい絵を手に取り凝視した。

「見て…………しまったんですね」

「!？」

背後から老人が現れた。虚で朧げな瞳で二人を見つめていた。

レヴィは思わず後退りながら問い詰めた。

「お、お前!! この絵はなんだ!？」

老人は身構えるレヴィにゆったりと近寄り――

懐かしげに悍ましい絵を拾い上げた。

「これね…………昔描いていたものなんですよ」

「はあ…………？」

レヴィは身構えた状態のまま素っ頓狂な声を上げた。

……………

ボロ達は絵を手にして再度焚き火を囲った。

レヴィは先程と違って姿勢良く老人に質問した。

「…………その、この絵、全然違うくないか？ その、オドロオドロしいって
いうか…………とても春を描きたいと言った奴の絵とは思えないと言う
か…………」

若干怯えているレヴィとは反対に、ボロは目を輝かせてその絵を見ていた。

「タシカニ、ハルトハ、ホドトオイガ。スゴイゾ、コレハ。コノヒトハ、

テンサイダ」

「そ、そうなのか？」

「マチガイナイ」

断言するボロ。レヴィは怪しげに眉を顰めていた。

老人は照れ臭そうに頭を掻いた。

「ありがとうございます。若い頃描いていたものなんですよ」

老人はポツリポツリと語り始めた。

私の生まれはあまりいいものではありませんでした。殴られ、必死に残飯を漁る毎日でした。

そういった生まれのせいなんでしょうね。年を経て自身の絵の才能に気付いた私は暗いモノを描く画家になりました。人の苦しみ、恐ろしいあの世、恐怖や絶望。そういったものを書いて稼いでいたんです。

貴族様も、有名な絵師達も、私の絵を見て素晴らしいと褒め讃えましたが、これほど表現できる絵はそうそうないと。

ですが、たった一人。私の絵が大嫌いだと言った者がいました。

私の妻です。

妻は所謂幼馴染というやつでして、同じ苦労を分かち合った、私が生涯で唯一愛した人でした。

妻は私のことを愛してると言ってくれましたが、絵だけは受け入れてくれませんでした。

それでも家族で食っていくには仕方がないと、何度も大喧嘩しながら絵を売って生活しました。

ですがある日のこと、妻が病気を患い、余命が幾許もないと診断されてしまいました。

年甲斐もなく泣き果てる私に、妻は最後の頼みをしたんです。

『私の絵を描いて』

その言葉に私は最初躊躇いました。

私の絵は何を描いても暗いものになってしまおう。だからこれまで何度頼まれても妻の絵だけは描いてこなかったんです。

ですが最後の頼みならばと、私は涙ながらに絵を描きました。精一杯妻を思つて、妻のことだけを考へて絵を描きました。

出来上がったのは酷く下手くそな、花びらに埋まった、まるで子供が描いたような絵でした。

それでも彼女は私の絵を見て言つたんです。

「この絵が大好き」と。

嬉しそうに微笑む妻を前にして、私はようやく気付いたんですよ。私が一番欲しかったのは、この一言だったんだと。

それ以来、私は暗い絵を描くのを辞めました。そして妻が目を閉じるまで彼女の大好きな春を描き続けました。

そして妻が亡くなった今でも、あの時の妻の笑顔が忘れられず描き続けているんです。

「これが初めて描いた妻の絵です」

老人は絵を二人に見せた。老人は黙つて絵を見つめる二人を前に少し恥ずかしそうに頭を掻いた。

「酷い絵でしょう？ 息子達もとつくに独り立ちしたんで、余生は納得できるまで描こうと思つてます」

するとボロは静かに首を振つた。

「ビドイダナンテ、トンデモナイ。トテモアタタカイ絵ダ」

ボロの言葉に老人は笑みを浮かべた。

「はは、ありがとう。やはり貴方は見た目に違わずお優しい人だ」

老人の言葉にレヴィは眉を顰めた。

「はあ？ 本気で言つてるのか？」

訝しげなレヴィに、老人はハッキリと頷いた。

「はい、これでも画家ですから。善い人かどうかの見分けくらいつきますよ」

「ふーん、コイツが、ね」

レヴィは疑わしげにボロを見つめた。

それから数日が経ち、老人はレヴィの絵を描き終えた。

「ふう……終わった」

「オオ、デキタノカ!!」

「ええ、なんとか間に合いましたよ」

老人は軽快に笑いながら出来たばかりの絵を差し出した。

「受け取ってください」

「ナニ? イイノカ?」

「はい、是非貴方に受け取ってほしいんです」

「ソウカ、アリガトウ」

老人は絵を手渡すと、すぐさま荷物を纏めあげた。

「さて、と。では私はそろそろ」

「アワタダシイナ。モウ、イクノカ?」

「ええ、春を先回りしなくては置いていかれてしまうので」

老人はキャンバスを背負い上げた。ボロとレヴィもつられるようにして荷物を纏め背負いあげ、老人と向かい合った。

「お時間ありがとうございます。私は西へ向かいます」

「ソウカ。ナラ、コレデサイゴ、ダナ」

「かもしれないですね。ですがいつか、貴方達と私の旅が終わったらまたお会いしましょう。その時はとっておきの春をお見せしますよ」

「バアハハハハ!! ソレハタノシミダ!!」

老人とボロは朗らかに笑い、握手をして別れた。

二人は老人の背を見送ったあと、東への旅を再開した。

……………

「なあなあ、貰ったのあたしの絵なんだろう? 見せてくれよ」

別れてすぐ、レヴィは自分の絵を見たがった。ボロは貰った絵をレヴィに差し出す。

「ホラ、キレイナ絵ダ」

春の日差しと暖かみの中で楽しそうに笑う少女が描かれていた。

「おー! なんだよめっちゃいいじゃん!! これでも満足出来ないのかな?」

「ガカトハ、ソウイウモノダ」

ボロは丁寧に絵を布で覆い、リュックサックにしまった。

世にも恐ろしい絵を描く画家は春を追いかけ優しい絵を描き続ける。

彼の旅がどこで終わるのかは分からないが、最後に描くのはきっと妻の絵だろう。

だって彼が最初に描いた春の絵は、とても優しくて、どうしようもなく愛に溢れたものだったから。